

少年少女
のための 国民文学



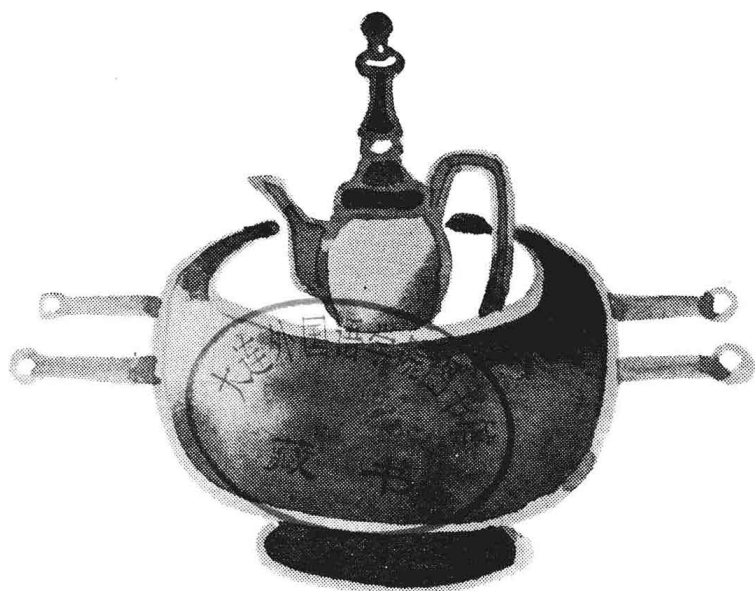
太平記

プロレタリアのための国民文学

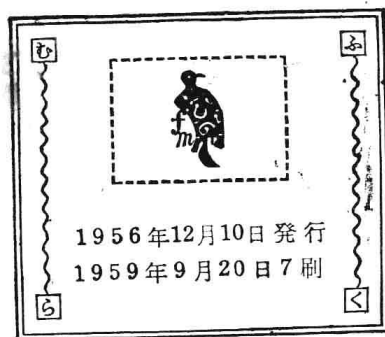
⑫

太平記

高野正巳



福村書店刊



少年少女のための
国民文学 ⑫
— 太平記 —

定価 330yen

著者 ^{たか}高 ^の野 ^{まさ}正 ^み巳

発行者 福村保
東京都文京区真砂町36番地

印刷者 谷上実
東京都台東区上野山下町2番地

印刷所 弘済印刷株式会社
東京都台東区上野山下町2番地

発行所 東京都文京区真砂町36番地
電話小石川(02)660・4664番
振替口座東京78313番

株式会社 福村書店



著者 高野正巳

明治三十八年福島県に生れ、
 昭和四年東京帝国大学国文科卒業。奈良女高師
 教授を経て文筆生活に入る。著書に「近世演劇
 の研究」「近松門左衛門集」その他児童読物多
 数がある。現在東京女子医大教授
 近世文学会員。日本児童文芸家協会評議員
 現住所 東京都渋谷区代々木山谷町一六七番地

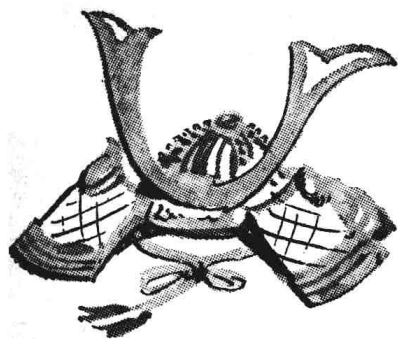
装幀 太田大八

挿絵 東光寺啓

は し が き

太平記はその内容から見ると、一種の歴史小説であります。主として戦乱のことばかり書きつらねてあるので、軍記物または戦記物とよばれ、この種のものは日本文学史の上では、保元物語、平治物語、平家物語、源平盛衰記などがあつて、一つの系列をなしているが、そのなかでも太平記は重要な地位を占めています。

戦記文学は太平記から後になると、信長記、大閤記などのように、個人の伝記を中心としたものにかわり、文学性がうしなわれ講談に近いものとなりました。もっとも太平記もはじめは琵琶法師によって語りつたえられ、その点で平家物語とおなじだったので、それが江戸時代になると、太平記読たいへいきよみというものができて、ちょうどいまの講釈師のように、ひとびとを大ぜいあつめて太平記を語ってきかせました。その意味で考えれば、太平記も講談に近くなったわけです。



太平記の作者は小島法師だといいつたえられています、はつきりしたことはわかりません。しかし、太平記は特定のある作者によって書かれたものでなく、琵琶法師が節ふしをつけて日本国中の老若男女ろうにやくのあいだに語りつたえているうちに、はじめはごく短かった物語が、だんだん長くて複雑な形になったもののようにあります。

こういう点から見て、国民文学とか民族文学とかいうことばが、太平記ほどぴたりあてはまるものはないでしょう。太平記のできたのは南北朝時代であって、全べんをつらぬいている精神は武士階級の主従間にできた義の観念であります。これは武士道とよばれるもので、今日の時代に合吻合点はかずかありますが、それでもなお幾多の美しいものをもっていることを忘れてはなりません。

昭和三十三年正月十七日

高たか野の正まさ巳み

太平記 目次

討幕の計画

二

俊基東下り

七

阿新丸

九

笠置落

一六

前赤坂城

二四

児島高德

三三

熊野落

三四

後赤坂城

五一

吉野の城軍

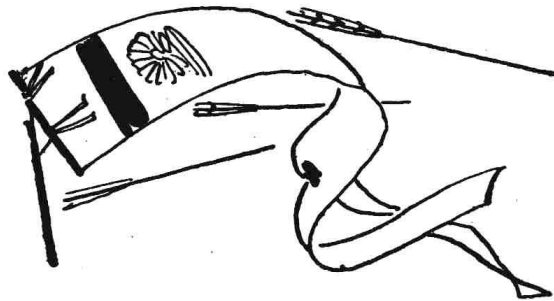
六一

千剣破の城軍

六七

名和長年

七七



赤松則祐
あかまつ せきゆう

一三

赤松京都攻
あかまつきょうと ぜめ

一六

赤松軍の敗退
あかまつ ぐん はいたい

一九

山崎合戦
やまざき かつせん

二六

千種忠顕
ちぐさ ただあき

二九

名越高家
なごや たかいえ

一五

六波羅攻
ろくはら ぜめ

一〇

六波羅落
ろくはら おち

一六

田楽舞
でんがくまい

二八

義貞の挙兵
よしさだ きよへい

一三

三浦の援軍
みうら えんぐん

二七

鎌倉合戦
かまくら かつせん

二九

稲村が崎
いなむら さき

一三

龜かめ 寿じゅ

一七

筑紫合戦つくし かつせん

一四

建武の中興けんむ ちゆうこう

一四

北条時行の乱ほうじょうときゆき らん

一四

尊氏の謀反たかうじ むほん

一五

矢矧合戦やはぎ かつせん

一五

尊氏の決意たかうじ けつい

一六

箱根合戦はこね かつせん

一六

官軍の敗北かんぐん はいぼく

一七

奥州の援軍おうしゅう えんぐん

一七

尊氏の再挙たかうじ さいきよ

一七

吹雪の行軍ふぶき こうぐん

一八

十六騎の援軍じゅうろくき えんぐん

一八

金崎落城 かねがさきらくじょう

一八

義貞の戦死 よしさだ せんし

二〇

北畠頼家 きたばたけあきいえ

二〇

畑時能 はたときよし

二四

正行の旗あげ まさつら はた

二七

住吉合戦 すみよし かつせん

三〇

如意輪堂 にょい りんどう

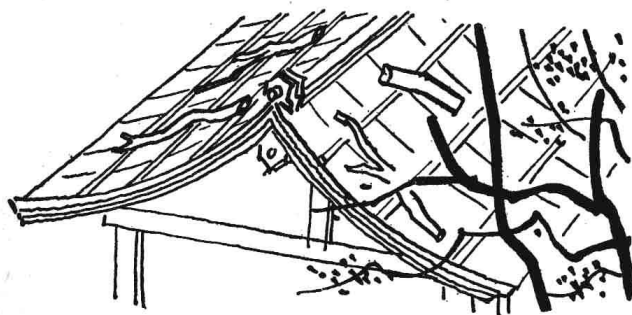
三四

菊池武光 きくち たけみつ

三九

解説 かい せつ

四〇





太平記

討幕の計画

源頼朝が鎌倉に幕府をひらいてから、政治の実権は武家にうつったが、朝廷においては絶えず政権をかえさせようと考へておられたのであった。

後醍醐天皇が御位におつきになると、時の執権北条高時は暗愚であつて、おごりにふけりすこしも政治に力をいれず、人心はだんだんと北条氏からはなれていくありさまだつた。そこで、天皇はこの時に乗じて幕府をたおそうと思ひたつた、そのことを日野中納言資朝、蔵人右少弁俊基、四条中納言隆資、伊大納言師賢、平宰相成輔の五人にご相談になつた。こうしておめしになつた諸国の武士は足助重成、土岐頼貞、多治見国長、そのほか、奈良、叡山の僧徒たちすこしばかりであつた。

朝廷での討幕のはかりごとは、秘密のうちにはこぼれていった。まず俊基は山伏の姿に身をかえて諸国をめぐるに苦心した。日野資朝は毎夜無礼講をもよおすと言ひふらして、ひそかに同志の公卿や武士たちを自分の邸にあつめ、いろいろと北条氏をほろぼす相談をすめた。

このはかりごとに加わつた武士のひとりに、土岐頼貞というものがあつた。その妻は六波羅の奉行をしている斎藤利行の娘であつたが、この頼貞が、ある夜のこと、うっかりと計画を妻にもらしたため、ついに取りかえしのつかないことになつてしまつた。

頼員の妻は、あさはかな女心から父や夫の命のせときわと考えて、いそいでそのことを父の斎藤利行にうちあけた。利行は大そうおどろいて、すぐさま頼員をよびよせ、

「いまの世に幕府をたおそうなどとたくらむのは、ちょうど石を抱いてふかい渚にとびこむようなものだ。もしこれが他人の口からもれたらどうする気か。おまえばかりでなく、わしらまでも殺されることになるのだぞ。わしはこれからすぐ六波羅殿へ申しでて、お前がひそかに知らせてくれたということにしようと思うがどうだ」

と、問いつめると、これほどの一大事を女に語りきかせるような心の小さい男のことだから、ひとたまりもなくびっくりして、

「いいえ、そのことは私がいいだしたものではありません。土岐頼貞、多治見国長の二人にすすめられて、しかたなしに仲間にはいったのです、どうか、罪にならぬようおとりなしてくださいますように」

と、おろおろ声でたのんだ。

斎藤はさっそく、まだ夜のあけないうちに六波羅へきて、事こまかにつけ知らせたのであった。

六波羅ではすぐさま鎌倉へ早馬をとばせ、一方京都ならびに近郊の武士たちにいそいであつまるように触れをだした。

ちょうどそのころ、摂津国葛葉というところの武士たちが地頭代にそむいて、戦争さわぎにまであつていたので六波羅では、おもてむきは葛葉の騒動をしずめるためだと言いつらして武士たちをあつめた。これは土岐、多治見らにそれと気どられないための謀なのであったが、土岐、多治見の兩人もまた、まさか事がもれたなどとは夢にも知らないから、自分らも明日は葛葉へたとうと用意をして、みなそれぞれ自分の宿におつたのであつた。

あくれば元徳元年（一三二九年）九月十九日のことである。朝の六時ごろ、雲霞のごとき軍勢が六波羅にむらがりあつまったかとみると、たちまち二手にわかれ、一ほう山本時綱のひきいる千五百余騎は土岐の宿所のある

三条堀河をさしておしよせ、他方小串範行が大将をうけたまわっている二千騎は多治見の宿所のある錦小路高倉にむかつてくりだしたのであった。いずれもその先頭には北条の紋所のついた旗をたてて、それが秋の朝ぎりになびいて、京都の町の人びとは何ごとがおこったのかと心配そうに見おくっていた。

山本時綱は道々こう考えた。こんなに大ぜいでおしよせていって、さわぎを大きくしたために大事な敵を逃がしでもしてしまうようなことがあつては一大事だ。それよりは、ひとつきやつめを生捕りにしてやろう、と、わざと軍勢を三条河原にとめおいて、自分だけただ一騎、中間二人に長刀をもたせ、そつと土岐の宿所へかけつけた。門前で馬をのりすて、小門から中に入つて、中門のほうを見ると、宿直のものらしいのが、鎧、かぶと、太刀、刀などをあたりに取りちらしたまま、ぐうぐう高いびきをかいて寝こんでいる。うまやのうしろをまわつて裏へいき、どこかにぬけ道はないかとしらべて見たが、うしろはみな土塀になつていて、門のほかには路もない。

これなら安心と、いきなりやしきのなかにふみこむなり、客間のおくの二間のふすまをさつと引きあけると、土岐朝貞はちょうどいま起きたところとみえて、髪をなであげていたが、時綱のほうをきつとふりかえつてにらみつけるなり、

「よしッ」

と、いうがはいか、そばにたてかけてあつた太刀をとつてたちあがり、間の障子を一枚けやぶつて、広い客間へとおどり出た。つづいて時綱も太刀ふりかざしながらあとを追うと、土岐はふりかえりざまに片ひざをつきながら、さつと一閃、太刀を横はらいにはらつた。あやうくとびのいた時綱は、ふたたび太刀をふりかぶつてうち下そうとすきをねらつたが、ひくい天井に太刀を打ちつけはしまいかと気がかりで、とかく思うようにはたらない。そこで、これはひとつわざと敵をさい出し、すきがあつたら生けどりにしてやろうと心にきめ、土岐のきりこむ太刀を打ちはらつてはしりぞき、うけながしてはとびのきして、双方秘術をつくしてたたかつていた

が、そのうちにあとからきた兵ども千五百余騎が二の木戸からなだれこみ、どっとときの声をあげた。土岐はきつとふりかえりながらこのありさまを見て、ぐずぐずしていては生けどられてしまうと思ったのであらう。もとの寝間へ走りかえって、腹を十文字にかききり、がばとうつぶせにたおれた。やしきのなかにおった一族郎党らもみな思いいともに討死をして、にげ出したものは一人もなかった。

こうして時綱は土岐の首をとつて太刀さきにつらぬき、六波羅へ引きあげたのであった。

多治見国長の宿所へは、小串範行が大将となり、二千騎ばかりでおしよせた。

その夜、多治見は酒盛をひらいて、夜中酒をのんでよいつぶれていた。ときの声におどろかされて目をさまし、とびおきさまにまくらにしていたよろいを着ながら、家来の小笠原孫六にようすを見てこいと命じた。

孫六は太刀を小脇にかかえて中門に走りでて、目をこすりこすり四方に目をくばると、車のわの紋どころのつ

いた旗じるしが、土塀の上にひらひらとひるがえっているのが目についた。すぐさまとんでかえって、

「六波羅から討手がまいました。討幕のはかりごとがもれたものと思われまます」

と、多治見にしらせ、それから皆のものにむかつて大声で、

「さあ、めんめん、太刀のつづくかぎりたたかつて、いさぎよく腹をきりたまえ」

と、さけびながら、自分は大いそぎで腹巻の鎧をとつて身につけ、二十四本の矢をさした胡籙を背負い、重簾の弓をひっさげて門の上の櫓にはせ上り、櫓の窓の板戸を八文字にひらき、よせての軍兵を見おろしながら、大音をあげて、

「やあ、大勢でおしよせたものかな。われらの手なみのほどを見せるよい機会だ。いったい討手の大将はだれか。ちかよつてこの矢ひとつ受けてみよ」

と、よばわりながら、十二束三伏もある中差の矢をとつて弓につがえ、きりきりと引きしぼってひようと射放

した。矢はうなりを生じながらとんでいつて、まっさきにすすんできた狩野下野前司の若党衣摺助房のかぶとの鉢をま正面から射とおして、馬からさかさまにおとした。これをはじめとして孫六はよろいのそで、草摺、かぶとの鉢、なんでもかまわず射まくったので、たち向つてきた敵兵二十四人はたちまちのうちに射ころされてしまった。

あとはもうただ一本の矢よりのこらなくなった。その矢をぬいて、

「この矢だけは冥途の旅の用心にもつていこう」

と、いつて腰にさし、からになった胡籙をば櫓の下へからりと投げおとし、さて、寄手にむかつて、

「日本一の剛の者が自害するありさまを見ておいて手本にせよ」

と、大どえにさけぶや、太刀の切っさきを口にくわえたまま、櫓からまっさかさまにとび下りて死んでしまった。

その間に多治見をはじめとして、二十余人の一族郎党

がよろい兜に身をかため、大庭におどり出て、門の関の木をさして待ちかまえていた。よせての軍ぜいは、雲霞のように十重二十重にとりかこんでいるが、門の中には決死のかくごの兵たちが、たてこもっている恐ろしさに、だれ一人としてその中へ斬りこもうとするものもない。そのうちに伊藤彦次郎というものの父子兄弟の四人が、門のとびらの少しやぶれたところから四つんばいになって中に入つていった。まことにいましいことではあったが、待ちかまえている敵のまん中にはい込んだのだからたまらない。敵と太刀をあわせるまでもなく、みな門のわきで討たれてしまった。

これを見た寄手のものどもはいよいよおそれをなして、門のそばに近づくものさえなかったので、多治見の一族郎党はしびれをきらし、中から門のとびらをおしひらいて、小串の軍勢を手まねぎしながら、

「討手にたちむかつておりながら、そのさまは見るしいぞ。早くこちらへお入りお入り。われわれの首を進上しよう」

と、からかったのであった。

これほどまでにはずかしめられては、さすがの寄手のものどもも、そのままこらえているわけにはいかない。まず先陣の五百騎が馬をのりすてると、どつとばかりに門の中へ乱入した。たてこもっている兵たちは、とてものがれられないと覚悟していることなので、一步でもひきさがろうとはしない。二十余人のひとたちは、みなおもてもふらず大勢の中にわって入り、さんざんに斬つてまわった。この勢いにおされて敵勢五百余人はたじたじとなり、門からそとへさつとばかりに退いてしまった。しかし、寄手は大ぜいなので、先陣がひけば二陣がおめきさけんでかけすすんだ。

こうしていれかわり、立ちかわり、朝の八時ごろから正午^{ひる}すぎまで、火の出るようなたたかいがつづけられたが、門のなかの兵たちはすこしも弱つたようなけはいが見えない。ここに小串勢の一方の大將に佐々木判官^{はんがん}というものがあつたが、大手（正面）からせめたのではとても落ちそうもないと見てとつて、手下の者千余人をひき

つれてうしろへまわり、錦小路^{にしきこうじ}のほうから人家をうちこわしてみだれ入った。多治見もいまはこれまでと思つたのだらう、二十二人のものどもは中門のところに二れつに並び、おたがいに刺しちがえて、算木^{さんぎ}をちらしたようにたおれふしたのであつた。これを見て大手の寄手のものどもが、門をやぶつておしよせるまに、搦手^{からて}（裏）の勢どもがはしりよつて、首をとつて六波羅さしてはせかえつてしまった。この四時間ばかりの合戦^{かつせん}で、手負^{ておひ}、死人のかずは二百七十三人というものすごいものであつた。

俊基^{としもと}東下^{あずまくだ}り

土岐、多治見がうたれてからは、討幕の計画がだんだんと知れてきたので、鎌倉からは長崎泰光^{やすみつ}、南条宗直^{むねなお}の二人が京都にのぼり、五月十日に俊基^{としもと}、資朝^{すけとも}の兩人をとらえた。土岐、多治見がうたれたとき、生捕りとなつた者は一人もなかつたから、討幕の計画について白状した